阿倍仲麻呂

十九日。日悪しければ、船出ださず。

二十日。昨日のやうなれば、船出ださず。みな人々、憂へ嘆く。苦しく心もとなければ、ただ日の経ぬる数を、今日幾日、二十日、三十日と数ふれば、指も損なはれぬべし。いとわびし。夜は寝も寝ず。

二十日の夜の月出でにけり。山の端もなくて、海の中よりぞ出で来る。かうやうなるを見てや、昔、阿倍仲麻呂と言ひける人は、唐土に渡りて、帰り来けるときに、船に乗るべき所にて、かの国人、馬のはなむけし、別れ惜しみて、かしこの漢詩作りなどしける。飽かずやありけむ、二十日の夜の月出づるまでぞありける。その月は海よりぞ出でける。これを見てぞ、仲麻呂の主、「我が国に、かかる歌をなむ、神代より神も詠ん給び、今は上中下の人も、かうやうに別れ惜しみ、喜びもあり、悲しびもあるときには詠む。」とて、詠めりける歌、

青海原振りさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも

とぞ詠めりける。かの国人、聞き知るまじく思ほえたれども、言の心を、男文字にさまを書き出だして、ここの言葉伝へたる人に言ひ知らせければ、心をや聞き得たりけむ、いと思ひのほかになむ賞でける。唐土とこの国とは、言異なるものなれど、月の影は同じことなるべければ、人の心も同じことにやあらむ。

さて、今、そのかみを思ひやりて、ある人の詠める歌、

都にて山の端に見し月なれど波より出でて波にこそ入れ